



「歴史」をめぐる政治：
イタリア・フェミニズム運動の新展開

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊田, 久美子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004814

「歴史」をめぐる政治： イタリア・フェミニズム運動の新展開¹

伊田 久美子

はじめに：歴史の構築

70年代以降の運動からおよそ半世紀を経て、これらの運動や研究動向の「歴史化」が進行している。日本では2000年代初頭から、新宿リブセンターや侵略＝差別と闘うアジア婦人会議をはじめ70年代の女性運動のビラや資料など印刷物やミニコミ誌等様々な資料集成が編纂され、近年は国立女性教育会館のような公的機関だけでなく、認定NPO法人ウイメンズ・アクション・ネットワーク（WAN）のような民間団体の尽力による電子アーカイブ化も進められている。当事者だった人々、同じ時代を生きた世代の大半はまだまだ存命である。近年はこの世代の人々の語りを通じた歴史化が進められている²。

7-80年代の女性運動を担ってきた世代は世代間の断絶を深刻に受け止めている。90年代に進められた男女共同参画政策はなかなか若年層に浸透しないように見える。行政が政策の拠点として設置した女性センターや男女共同参画センターを利用する個人も女性団体も一定の年齢層以上にとどまり、若い世代の参加が乏しい状況はますます顕著になっている。70年代

¹ 本稿は文部科学省科学研究費補助金基盤研究（B）「ジェンダー平等社会の実現に資する研究と運動の架橋とネットワークキング」（代表：牟田和恵、2014～2017）による研究成果の一つである。イタリアに於ける2011年以降の新しいフェミニズム運動の詳細については伊田（2018）を参照されたい。

² 代表的なものとしては、松井久子監督「何を怖れる——フェミニズムを生きた女たち」（2014）、山上千恵子監督の「闘い続ける女たち——均等法前夜から明日へ、バトンをつなぐ」（2017）のようなドキュメンタリー作品、一橋大学の『ジェンダー研究を継承する』（2017）などをあげることができる。

以降に新たに提案されてきた女性学、ジェンダー研究などにおいても同様の傾向は指摘される。そして若い世代の全般的「保守化」を懸念する言説も流布している。70年代という近い過去の歴史化の背景には、そうした先行世代の全般的危機意識が存在しているように見える。

言うまでもなく歴史とは客観的な事実の記録ではない。何がどう保存され記述され定義されるかは、きわめて今日の問題関心と状況依存的「都合」により、決定される。「継承しなくてはならない」という危機意識は歴史の構築の推進力として、そしてある種の認識枠組みとして作用するであろう。関係者の多くが存命である近い過去であれば、なおさらである。

本稿はよく似た状況にあったイタリアのフェミニズム運動の近年の新しい展開を「歴史の構築」という視点から検討し、日本の状況への新たな視点を示唆することを目指している。筆者の考える結論を先に述べれば、過去の社会運動が、その担い手であった世代の目に見える形で「引き継がれる」ことは困難であるが、先の世代が自らの経験の相対化と、変化する情勢の動態への感性を失わなければ、過去の経験は新たな世代の先の世代へのとりあえずの儀礼的リスペクトにとどまらない有用性を持つことができるだろうと考える。

「近過去」*passato prossimo*とはイタリア語文法において、現在につながる文脈における、現在と切り離し難い、にもかかわらず現在とは区別される過去を表す。「継承」とは、世代経験の近過去としての歴史化に他ならない。歴史化とは事実の中立的記録ではなく、多様な解釈の間の正統性をめぐる闘争のダイナミックなプロセスである。イタリアにおけるフェミニズムの新たな展開は、近過去形の歴史の構築をめぐる闘争としての側面を持っている。イタリア語の「歴史」*storia*は「物語」と同じ語である。歴史は客観的な記録ではありえない過去の再構築であり、ある特定の視点からの物語に他ならない。そして当然物語はひとつではなく、継承は先人の語りの従順な傾聴ではありえない。

本稿の構成は次の通りである。第1章で近年のイタリアにおけるフェミニズム運動の新たな展開を、そこにおける70年代フェミニズムの歴史的位

置付けと評価を含めて概観する。第2章では若い世代の登場と先のフェミニズムへのスタンスを検討し、第3章で、歴史の構築をめぐる闘争と忘れられた運動について考察する。

1. 広場に戻ってきた女たち

——イタリアにおける近年の新たなフェミニズム運動

1970年代には第2の波と呼ばれるフェミニズム運動が世界各地で広がった。イタリアでも強力なフェミニズム運動が各地で大規模な街頭行動を組織し、多くの女性たちが広場と街頭を埋め尽くした。様々な対立や矛盾はありながらも、左派政党や議会外左翼勢力との連携も推進し、離婚法(1970年)、家長権を廃止する家族法改正(1975年)、男女雇用機会均等法(1977年)、中絶の権利を認める法律(1978年)、名誉犯罪の廃止(1981年)などの目覚ましい成果を挙げて来た。

近年イタリアの女性運動は新たな盛り上がりを見せ、女性たちは再び広場に戻って来た。本節ではこの新たなうねりを牽引した代表的な運動として、*Se non ora quando?*(今でなければいつ?)の合い言葉による全国規模の女性の行動、そしておよそ40年のブランクを経て再開されたフェミニスト全国大会パエストウム(Paestum)2012の二つの動きを中心に概観する。

1.1 *Se non ora quando?*(今でなければいつ?)

2011年2月13日はイタリアの政治状況を揺さぶる記念すべき日となった。イタリア全国の広場が「*Se non ora quando?*」(今でなければいつ?)というスローガンを掲げた女たちに埋め尽くされた。230以上の都市(同日付コリエーレ・デラ・セーラ紙)で150万人以上の女性が街頭行動に参加した。ローマ、ミラノ、ナポリでは10万人、パレルモでは2万人、トリエステ、バーリ、ペーザロ、ベルガモ、ジェノヴァで数千人、さらにはブリュッセル、パリ、バルセロナ、ニューヨーク、東京³など、国外でも約50都市で女性たちの抗議行動があった。性的スキャンダルにまみれた当時

の首相ベルルスコーニに対する痛烈な抗議行動は「歴史に残る一日となるだろう」（同日付イル・ファット・クォティディアーノ紙）と言われた。私たちはまずこの動員力に目を奪われる。今もウェブには7年前のこの日の各地のデモンストレーションの夥しい画像や動画が溢れている。

2月13日の行動が呼びかけられたのは僅か1ヶ月前の1月20日、特徴的なキーワードはliberta'（自由）とdignita'（尊厳）であった。「イタリア女性の尊厳」とはベルルスコーニの言動に象徴される女性の性的道具化が踏みこじってきたものであり、数多くのスキャンダルの挙げ句に愛人を男女機会均等大臣にする、ヨーロッパ議会の議員に政治経験のほとんどない女性を推薦する⁴等の行為を通じて、能力発揮よりはセクシーな容姿を磨き、権力者に気に入られることの方が社会的上昇につながる、という女性蔑視と女性の道具化の政治状況に対する痛烈な怒りを表している。

これは単にベルルスコーニ個人の言動や倫理観の問題ではなく、それに象徴される政治や社会、とりわけメディアのあり方への怒りの表明であった。すでに2009年にジャーナリストのロレッタ・ザナルドラが制作したドキュメンタリー作品「Il corpo delle donne（女の身体）」⁵が公開され、大きな反響を呼んでいた。この作品はイタリアの主要チャンネルのテレビ番組における作られた女性像および女性身体の性的表象としての道具的扱いを告発するもので、ザナルドのブログには非常に多くの共感のコメントが寄せられていた。テレビにおける女性表象のセクシズムと代表的テレビ局の経営者でありイタリアのメディアを支配するベルルスコーニの思想や行動は明らかに同質のものであり、ベルルスコーニに代表される性差別的メディア文化がベルルスコーニの言動を通じてイタリアの政治を直接的に左右するまでに至ったと言える。

³ 日本でもイタリア文化会館前で集会が開催された。参加した兩宮処凛氏のブログにその様子が記されている。<http://www.magazine9.jp/karin/110216/> 2017年12月26日閲覧)

⁴ ベルルスコーニに群がる女性たちの中には政治家に抜擢された者もいる。代表的なケースを挙げると、モデルでベルルスコーニの愛人であったマウラ・カルファーニャは機会均等大臣 (!) に就任した。

⁵ ザナルドのブログに公開されている。

<http://www.ilcorpodelledonne.net/documentario/>

2011年2月13日の全国行動はこのような政治状況に対する女性の不満が爆発したものであり、「これ以上我慢できない」という女性の憤懣を表明したスローガンが「Se non ora quando? (今でなければいつ?)」(以下Snoq)であった。わずか1ヶ月前からのウェブサイトやSNS等による呼びかけの結果、全国230以上の広場での150万人を超える人々の動員を実現したのである。当日の全国紙は各地の行動を詳細に伝えている。上述のイル・ファット・クォティディアーノ紙は各地のデモの様子を詳細に伝えている。ミラノでは多くの女性たちが今までの時代を葬送して喪に服すことを意味する白いショールをまとい、ナポリでは白いシャツを着ていた。トリノでは女性たちは「私たち女に投げられた泥を避けるため」と書かれた色とりどりの傘をさして歩き、Rai(国営放送局)の前で激しい抗議のシュプレヒコールを行った。マスコミの女性身体の性的利用やジェンダー差別への批判は、近年の女性運動の重要な課題の一つであり、放送界を独占していたベルルスコーニに対する批判の表明であった。さらにヴェネツィア、バーリ、パレルモ、トリエステ、ペーザロ、インペリア、カリアリなど、半島の北から南、そしてシチリアやサルデーニャを含む全国各地での、またブリュッセルでの、それぞれに特色ある行動を詳細に伝えている。政府関係者は「一部の過激派」「頑固な昔の活動家」といったラベリングによる抗議運動の矮小化を試みたが⁶、それ自体が政権への打撃の深刻さを示していたと言える。結局ベルルスコーニはこの年の11月に退陣に追い込まれることになる。

この運動は自然発生的な、雑多な集まりである。均質で閉鎖的な政治集団としての参加はなく、70年代フェミニズム世代から若年層まで多様な世代が個人や友人の小グループとして参加している。デモ行進は整然としているが、活気があり、明快で挑発的なスローガンが溢れている。そして政党や組織の旗は見当たらない。イタリアは昔から人々の街頭行動が盛んな国であったが、政治集団の旗のないデモンストレーションは以前にはな

⁶ 文部大臣(当時)マリアステラ・ジェルミーニとベルルスコーニの与党PDLの下院議員代表ファブリツィオ・チッキットの発言である(La Stampa, 2011年12月12日)。もちろん大手新聞報道がこの種のラベリングに便乗することはなかった。

かった。

この運動は組織化の質や方法において、明らかに「昔の運動」とは異なるものであった。世代を超えて普段は出会わない人々が多様な個人のまま、ひとつのスローガンを共有して行動する。広場で次々に壇上に上がり発言するのは著名人やいわゆる活動家だけではなく、日頃は街頭行動に参加することなどなかった、ごく普通の女性たち、そして男性たちであった。貧困女性の支援を行う修道女のような「保守的」とされる聖職者から、ラディカルな労働運動に共鳴する女性非正規雇用者（プレカリア）まで、思想的背景も世代も多様な女性たち、および女性の訴えを支持する男性たちであった⁷。この日の街頭行動は量的にも質的にもかつてなかった新しい運動スタイルを実現したと言える。

行動を呼びかけ牽引した女性たちの動きは、すでにその1年半前に開始されていた⁸。ベルルスコーニの性的スキャンダルと女性の性的利用に汚染された政治に対してこれ以上黙っていることができなくなった女優、映画監督など著名人を含むローマの女性たちが2009年に集まり、異議申立ての行動を検討し始めていた。グループは“Di Nuovo”（もう一度）と名乗った。この名称は新たな始まりと再帰を共に表すべく採用された⁹。メンバーの多くは70年代フェミニズムを経験してきた世代である。彼女らはフェミニズムの再生が必要であると考える一方で、社会を変えていくためには新たな運動スタイルが必要であることを痛感してもいた。とりわけ70年代フェミニズムの特色とされた分離主義の克服はこの新しい運動の特徴であった。女性の政治的代表性を高め、社会を変えるには多様な人々の理解と共感による連帯が不可欠だからである。イタリアでは70年代に特色あ

⁷ この運動の焦点は政治への異議申立てに当てられていたことは明白であるが、Snoqの要求はベルルスコーニに代表される女性を侮辱する政治にノーを突きつけるだけでなく、母親および父親の出産休暇と補償の充実や解雇防止規程、そして一般財源の負担による出産の保障など、女性の労働をめぐる要求が多くを占めていた。続く3月8日国際女性デーの全国行動では夥しい女性たちが職場での差別の経験を次々に訴えた（La Stampa, 2011年12月12日）。

⁸ 雑誌Genesis 2011年11月号に呼びかけ人たちのインタビューが掲載されている。

⁹ アメリカの詩人グレース・パレイの「バスで」の詩句を用いている（Se non ora quando? La storia, 1-3）。

るフェミニズム運動が存在した。にもかかわらず、女性の政治参加は日本と同様に非常に低く、経済格差も大きく、ジェンダーギャップが一向に改善しない状況が続いていた。

1.2 政治的 대표性の要求と「歴史的」フェミニズムの相対化

Snoqのもっとも重要な要求は女性の政治的代表的性の推進であった。「Mai piu' senza di noi (もはや私たち女性抜き政治はあり得ない)」はSnoqのスローガンのひとつであった。ベルルスコーニ退陣後に組閣したモンティの内閣には3名の女性閣僚が実現した。2012年にSnoqは女性と男性の対等な政治参加を要求する行動を推進し、ボローニャ、ミラノで代表性についての討論を行い、内閣をはじめ、地方行政、州議会、国会でのジェンダー平等な代表性を要求する運動を展開した。人口の半分は女性なのだからクォーター制¹⁰どころか“50-50”を目標とすることがSnoqの主張であった。

イタリアは女性の政治参加が極めて遅れていた国であったが、2013年2月の総選挙では女性の議員比率は急増し、下院は31.4%、上院は29.0%と、選挙前よりそれぞれ10%増加した。

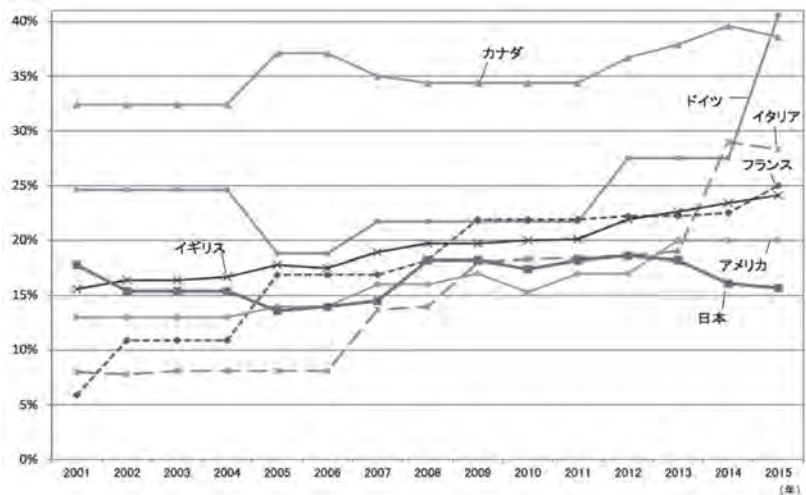
図1において、2012年までは日本と同じく底辺をさまよっていたイタリアの2013年以降の折れ線の上昇は、状況の急変を示している。2014年に組閣したレンツィ内閣では、女性閣僚は半数に及び、女性の政治的プレゼンスは著しく拡大した。

イタリアでは、2012年に政党候補者数において一方の性が3分の2を超えている場合は政党国庫補助が5%減額されるとの措置（法律第96号）が導入されたが、それ以上に民主党と5つ星運動¹¹が候補者名簿の上位に女性を登載した影響が大きいと言われている（国立国会図書館 2015）。しか

¹⁰ イタリアではquote rosaと呼ばれている。“rosa”（ばら色）はしばしば女性を表す。Snoqのロゴの背景もばら色である。色彩のジェンダーバイアスはあまり議論されないように見える。

¹¹ Movimento 5 Stelle：2009年にミラノで結成された政党。党首は著名な喜劇役者のベッペ・グリッロである。

し立法措置にせよ、政党の候補者名簿の変化にせよ、2011年からのSnoqの大衆的運動がなければ、このように速やかな変化は生じなかつただろう。Snoqが要求してきた女性の代表権は大きく前進したのである。



(出典) IPU, "Archived Data," *Women in National Parliaments*. <<http://www.ipu.org/wmn-e/world-arc.htm>>から、各年1月現在(2002年のみ2月現在)のデータを基に政治議会課作成。ただし、日本の2002年のデータは欠損のため、参議院事務局『参議院審議概要第154回国会(常会)』2002, p.14を基に算出。

【図1】 国立国会図書館(2015)より：G7諸国議会上院の女性議員比率の推移(2001～2015年)

Snoqの運動は、個人を基本にしたゆるやかで多様なネットワークを運動の基盤とすることによって、多くの人々の自発的動員を実現し、もはや女性を無視できない情勢を背景に、交渉力を発揮できるようになったと言える。Snoqのメンバーから政界で活躍する女性たちも出ている。現ジェンテローニ内閣の文部大臣、ヴァレリア・フェデーリはSnoq立ち上げ時からのメンバーである。

1.3 フェミニスト全国大会（パエストウム 2012）：「歴史的」フェミニズムの再生

一方70年代フェミニズム運動の文字通りの再来というべき動きはSnoqの全国行動の後に生じた。2012年10月5、6、7日の3日間、ナポリの南のパエストウム（ペストウム）で、1000人も女性が集うフェミニスト全国大会が開催されたのである。

パエストウムは1976年に3回目のフェミニスト全国集會が行われた地である¹²。その後全国集會はこの2012年まで開催されることはなかった。「政治的経済的危機の時代を生き延びるために、フェミニストは社会変革に挑戦するのだ、必要なのは革命だ！」というラディカルな呼びかけと、パエストウムの古代遺跡の有名なフレスコ画「跳び込む男」のパロディ「跳び込む女」のポスター（図2）からは、呼びかけたフェミニストたちのドラスティックな路線変更の意志がうかがわれる¹³。



【図2】フェミニスト全国大会（パエストウム 2012）のポスター。「跳び込む女 パエストウム21世紀」と記されている。

¹² 第1回、第2回はピナレラ・ディ・チェルヴィアで1974年、1975年に開催された。

¹³ 70年代イタリアフェミニズムの資料の中には、芸術的な、あるいはユーモラスなイラストやポスターの類がたくさんある。このポスターも近い将来には貴重な歴史資料として、資料館に保存されることになるだろう。イベントを景気付け、参加者の心に残り続けるだけでなく、女の経験を歴史として生き延びさせていくために、ポスターやイラストは有効であり重要である。

この大会案内は宿泊やら会場へのアクセスの案内はとても親切だが、驚いたことにプログラムはまったく決まっていない、というより存在しない。すでに開会の数ヶ月前から大会ブログには一般参加者のメッセージがたくさん届いていたが、大会そのものも、有名人の基調講演も分科会も予定されず、だれもが好きなように発言できる場がめざされていた。安易に收拾をつけようとせず、世代、人種、地域など、女の中の違いや対立に向き合おうとする果敢な方針が示されていた。

この大会の呼びかけもウェブとSNSの効果に大きく依拠していた。登録者へのメルマガでの発信とHPによる情報提供に加えて、大会前後の長い期間のウェブでの意見交換の継続は、かつての運動にはなかったことである。また集会の様子はHP上にたくさんの画像や動画で紹介されているが、参加者による報告もウェブ上に溢れ、情報が多元的に配信されることもまた新しい現象である。しかし大会運営のこの意図的な仕切りのなさに代表されるスタイルは、70年代フェミニズムを代表しているとされてきた「歴史的」潮流の特徴そのものである。

この36年ぶりの全国大会を呼びかけたのはミラノで活動を続けて来た「歴史的」フェミニストのグループである。フェミニスト全国大会の長い「ブランク」には1970年代後半期のテロリズムに向かう危機的な情勢の中での政治運動の衰退など様々な事情があったと思われるが、そもそもミラノにおいて主流となった均質な小グループによる内省的意識変革運動 (autocoscienza) は、全国レベルで結集し交流することによって政治的プレゼンスを高めるような動きとは真逆の志向性を持っていたことは確実である。しかし70年代フェミニズム運動の資料アーカイブの形成にいち早く取り組んできたのはこの潮流であった。そしてこうした運動に70年代フェミニズムの「歴史」を代表させる70年代フェミニズム史が、80年代以降に構築されてきたのである (伊田 2014, 2015)。

このフェミニズム史は主にミラノのフェミニスト・グループによる資料館の設立と資料収集運動、及び全国のネットワークの立ち上げと運営などを通じて構築され、フェミニズム運動を小グループによる内省的意識変革運動 (autocoscienza) による身体やセクシュアリティについての取り組

みとして定義していった。大衆的な動員による政治運動とは一線を画すことにより、この「特色」は定義されたのである。そしてこの「一線」は既成政党や新左翼運動だけでなく、フェミニスト運動の中の大衆運動にも「画された」。離婚や中絶の合法化も、家族法の改正も、政治運動なしには実現できなかったにもかかわらず、イタリアの70年代フェミニズムは、小グループのautocoscienza運動の担い手であり、後年「歴史的フェミニスト」と呼ばれる人々によって、彼女らの運動を「正史」として構築してきた。

2012年の全国大会開催の呼びかけは、おそらくは1年前からのSnoqの目覚ましい動きに触発されたものであっただろう。パエストゥム2012の運営を担ったLibreria delle donne di Milano（ミラノ女の本屋）は、Snoqが限界を指摘した「歴史的」フェミニストの潮流である。「歴史的」と呼ばれるフェミニストたちは総じて、左翼勢力と同様に、首相の「私生活」に踏み込んで保守反動のモラリストのように見られることを恐れ、ベルスコニの性的乱行と女性蔑視の言動を積極的に批判しようとはしなかった。このフェミニストの沈黙への苛立ちはSnoq呼びかけのきっかけの一つであった。Di Nuovoの立ち上げ時から、「歴史的」フェミニストたちはSnoqの運動、とりわけその反分離主義を厳しく批判し¹⁴、Snoqは「歴史的」フェミニズムとの違いを明確にしてきた。しかし小グループによる内省的な「歴史的」運動スタイルを180度転換して全国集会を呼びかけ、政治的発言と行動を呼びかけるという新たな動きにはSnoqの運動の強い影響が窺えるのである。パエストゥムの「跳び込む男」は遺跡の墓所の棺の裏に描かれている。この男の行動はスポーツとしての跳び込みではなく、来世へのジャンプであると言われているが、36年を経てのフェミニスト全国集会がこの絵柄を採用したのは、内省的な活動を重ねて来た「歴史的」フェミニストたちが、生存自体を脅かされる近年の危機的情勢を前に、政治的

¹⁴ フェミニストの歴史家ルイザ・パッセリーニはDi Nuovoのブログに批判コメントを掲載し、同じくフェミニストの歴史家ルイザ・ムラーロと代表的「歴史的」フェミニストを代表するレア・メランドリはCorriere della sera紙に批判の記事を載せ、Snoqの「女性の尊厳」という主張に保守的なモラリズムの動員があることを批判した。

行動に踏み切る、その「思い切り」を意味しているのかもしれない。3日間に渡る全国集会での論点は政治的代表性に集中し、身体、セクシュアリティや女性に対する暴力、不安定雇用（プレカリエタ）など、歴史的にも今日的にも重要な論点は時間の不足からほとんど議論されなかったという（Pisa 2017）。

2. 若い世代のフェミニズム運動の登場

パエストゥムの全国フェミニスト大会から、ローマの若手フェミニスト・グループが誕生した。フェミニスト全国大会は翌2013年以降も2016年まで開催されたが、2013年の大会では、2012年にパエストゥムで出会い結成されたFemministe Nove¹⁵（F9 新しいフェミニストたち）と名乗るローマの若い女性グループが登場し、「歴史的」フェミニストに対する挑戦的メッセージを込めたマニフェストを発表した。「新しいフェミニスト」とは、従来のフェミニズムの継承者ではなく、交替要員でもないこと、不安定労働者（プレカリエ）である自分たち自身から始めることを意味している。そして自分たちこそが現代という困難な時代に立ち向かう「歴史的フェミニスト」であると名乗っている。

Siamo femministe nove. Non siamo ereditiere, siamo precarie. 私たちは新しいフェミニストである。私たちは遺産相続人ではなく、不安定労働者（プレカリエ）だ。

Non siamo staffette, siamo partigiane. 私たちは交替要員ではなく、パルチザンだ。

F9のマニフェストは、70年代から続く女性学の雑誌であるDWF（DonnaWomanFemme）n. 98, 2013に、その全文が掲載された。雑誌編集部による解説は、このマニフェストのトーンが70年代のautocoscienza（意

¹⁵ “nove” は“9”の意であるが、“nuove”（新しい）の女性複数形でもある。

識変革の実践)に類似している、と述べている。たとえばマニフェストは自分たち自身からの出発を原点とすると宣言しているが、この原点自体が「歴史的」と呼ばれるフェミニズムの特徴であり、それはとっくに言われ、実践されてきたことなのである。しかし現代の若い世代の「私たち」は70年代の「私たち」ではない。時代状況は大きく異なる。かつて今も失業問題は深刻であるが、70年代の労働と異なり、今日の若者はまさに「不安定」(プレカリエ)な状況の中で生きて行かねばならない。70年代フェミニズムを担った女性たちは、教師、研究者などの比較的安定した職業に就く者が多く、経済的にも労働時間の面でも運動を継続する余力のある人々であった。しかし労働者の権利がまだ守られているイタリアにおいても、若い世代の労働の不安定化は著しく、高学歴の若者の多くは英語圏をはじめとする国外に職を求め、イタリアを出て行くのである。国内にとどまる若者の多くは失業と不安定就労にさらされている。労働だけでなく、運動の条件も、先の世代とは大きく異なるのである。

図3はF9の2015年のメーデーの時のもので、横断幕には「私たちは嵐(テンペスト)の娘だ。お前たちの海を荒らしてやる」と書かれている。メーデーのマニフェストで、この若い女性集団は次のように主張する。

「不安定性」(プレカリエタ)は、ある状況についての集合的意識などではなく、広く出現している状況そのものである。それは個別の貧困そのものの孤独な認識として広がっている心的状況である。政治的言説はそれを再吸収すべき緊急事態、あるいは取り除くべき吹き出物であるかのように語るが、「プレカリエタ」はその政治的言説自身が作り出し予測していたものである。……「プレカリエタ」はアイデンティティではなく、私たちが生きている場であり、対立や自由の実践を構築する場である。私たちはこれを取り除きたいのではなく、変革したいのである。(Manifesto Femministe Nove, 1 maggio 2015)

manifesto femministe nove



Ricordiamo il Primo maggio pubblicando uno stralcio del manifesto di femministe nove:

【図3】Femministe noveのメーデーでの街頭行動 2015年5月1日
<https://laboratoriodonnae.wordpress.com/2015/04/29/manifesto-femministe-nove/>

運動の「継承」とは、むしろ反面教師として踏み越えられることなのではないか。「歴史的」フェミニストたちのパエストゥムにおける「革命」が、先の世代の批判から出発する若い世代の登場を促したのであれば、それこそが継承であると言えよう。先の世代が若者たちの主張に既視感しか感じないとすれば、彼女らは女性という立場に置かれた者としての共通の課題を自明のものと捉えているが故に、社会状況の大きな変化を認識できないのかもしれない。

3. 歴史化の過程で消去された家事労働賃金要求運動

70年代フェミニズムの歴史化のプロセスは大衆的政治運動との差別化による自己定義によって歴史化を図ってきた（伊田 2015）。近年の新しい運動は、その「歴史的」フェミニズムへの批判から出発している。70年代の女性たちの街頭行動、例えば1976年のローマにおける「夜を取り戻そう」とのスローガンを掲げた大規模な夜のデモ行進は、近年の性暴力、女性殺戮（femminicidio）を含む女性に対する暴力に反対する運動の中で再

び注目されるようになった。意識変革運動（autocoscienza）だけではない政治的行動のフェミニズムの歴史への注目が、今日の新たな運動とともに、70年代フェミニズムの歴史を書き換える、というよりは上書きしていくことになるだろう。しかし今なお「消去」されたままの運動が70年代には存在していた。それは家事労働賃金要求運動である。その規模からも影響力からも到底無視することのできないはずのこの運動は、いまだに70年代フェミニズムの歴史において無視されるか、記載されても周縁的な扱いにとどめられている。私はこの運動の消去こそがautocoscienza運動の「歴史的」フェミニズムとしての正統性の確立に用いられてきたことを論じてきた（伊田 2014, 2015）。70年代フェミニズム運動の歴史の相対化が進む今日、家事労働賃金要求運動の再検討と再評価は、いまだに残された今後の課題である。

【主要参考文献】

- Amabile Flavia, “Sono tornate in piazza le donne di Se non ora quando? Quando è nato il movimento?”, *La Stampa*, 12-12-2011.
- Balsamo Franca et al. (a cura di), 2004, *Violenza contro le donne: percezioni, esperienze e confini*, Torino, Isef.
- Cavallari Rita, Robiony Simonetta, 2015, Se non ora quando?- La STORIA, Chi siamo e cosa vogliamo, <http://www.chelibertà.it/category/se-non-ora-quando-la-storia/>
- Femministe 9, 2013, Manifesto@Femministe 9, DonnaWomanFemme, 98.
- Il fatto quotidiano, 2011, “Il riscatto delle donne, ma non solo: Oltre un milione di persone in 100 piazze”, *Il fatto quotidiano*, 13-2-2011.
- , 2011, “Le donne di “Se non ora, quando?” tornano in piazza. “Mai più’ senza di noi”, *Il fatto quotidiano*, 30-11-2011.
- Iossa Mariolina, 2011, “Protesta di piazza, e’ il giorno delle donne”, *Corriere della sera*, 13-2-2011.
- Izzo Francesca, Davoglio Elisa, Sapegno Maria Serena, De Clementi Andreina, Fiorino Vinzia, 2011, “Se non ora, quando?” Tavola rotonda, *Genesis*, X/1, Roma, Viella, 177-190.
- Marconi Federica, “Femminicidi in aumento, quest’anno sono già 114. Boldrini “Uomini uscite dal silenzio””, *L’Espresso*, 23-11-2017.

- Melandri Lea, 2011, “Non siamo l’esercito della salvezza”, *Corriere della sera*, 13-2-2011.
- Muraro Luisa, 2011, “Il grande errore e’ andare in piazza per conto di altri”, *Corriere della sera*, 10-2-2011.
- Pisa Beatrice, 2017, Femministe di ieri e di oggi, in Perry Wilson, *Italiane: Biografia del Novecento*, Laterza, Roma- Bari.
- Rosa Elena, 2017, エレナ・ローザ「イタリアの広告に見る女性身体表象のステレオタイプ」伊田久美子訳・編, 女性学研究：大阪府立大学女性学研究センター論集 (24), 39-56.
- Zanardo Lorella, 2010, *Il corpo delle donne*, Milano, Feltrinelli.
- 伊田久美子, 2011, 「バトンを渡すということ：マルクス主義フェミニズムからおひとりさまへ」(総特集：上野千鶴子) 現代思想 39(17), 88-93.
- 伊田久美子, 2014, 「70年代イタリア・フェミニズム史の再検討：家事労働賃金要求運動を中心に」, 女性学研究：大阪府立大学女性学研究センター論集 (21), 93-119.
- 伊田久美子, 2015, 「七〇年代イタリア・フェミニズムにおける家事労働賃金要求運動: 「労働」の定義をめぐる闘いとその「消去」」, 世界人権問題研究センター研究紀要, 215-257.
- 伊田久美子, 2018, 「イタリアにおけるフェミニズム運動の新たな動向：世代間継承の可能性」牟田和恵編『架橋するフェミニズム——歴史・性・暴力』(電子書籍として出版予定)
- 国立国会図書館, 2015, 「女性国会議員比率の動向」調査と情報——Issue brief-Number 883.